

I サムエル 29 章「主の計らいによって」

これまでの信仰の歩みの中で、不思議な主の導きを経験したことがあるのではないでしょう。思わぬところから助けが与えられたり、ストップがかかったりしたことがあったことでしょう。聖書の中にもそのような場面が多く出てきます。その背後に神、主の御手が働いていることをみことばは教えています。

1. ダビデの同行に対して（：1～5）

29 章からは再びダビデの行動が記されていきます。1～2 節。ペリシテ人の全軍はイスラエルと戦おうとしてアフエクに集結しました。29 章の出来事は、28 章 3 節からのサウルの出来事よりも時間的には前のこととなります。そして、28 章 1～2 節のダビデとガテの王アキシュの対話に続く出来事です。ダビデと部下たちもアキシュに従って出陣しました。イスラエルとの戦いが始まったら、ダビデたちはどう行動すれば良いのでしょうか。

アフエクに集結したペリシテの首長たちはアキシュに従って来ているダビデとその部下たちを見て言いました。3 節。他の首長たちのことばは当然です。それに対してアキシュはダビデが信頼に足る人物だと語ります。しかし、他の首長たちはアキシュに対して腹を立てます。ダビデが戦いの最中に寝返って、自分たちの首を取り、「自分の主君」サウルに差し出して、サウルの好意を得ようとする危険があると指摘します。そのような危険があるかもしれないのに、何の警戒もしないアキシュに他の首長たちは腹を立てたのです。

このような不信と警戒から「この男を帰らせてほしい」と首長たちは言いました。このことはダビデにとっては助けとなります。アキシュの信頼を損なわずに、イスラエルとの戦いに行かずに済むのです。ダビデは何も対処できずにいたのですが、結果として助けが与えられるのです。このこと背後に神、主の導きを感じることができます。

このように主は信仰者を守ってくださいます。それも信仰のない者たちを用いることもあるのです。私たちが罪を犯すことがないように、主が周りの状況を動かしてくださって、私たちを助けてくださることがあるのです。詩篇 121 篇を思い起こします。「私は山に向かって目を上げる。私の助けはどこから来るのか。私の助けは主から来る。天地を造られたお方から。…主はすべてのわざわいからあなたを守り あなたのたましいを守られる。主はあなたを 行くにも帰るにも 今よりとこしえまでも守られる」(1-2, 7-8)。創造主である神、主はその御力によってみわざを行っておられます。ご自身のみこころにしたがって信仰者を守ってくださいます。その主を信頼し、賛美したいと思います。

2. アキシュの善意により（：6～11）

アキシュは他の首長たちの訴えを受け入れない訳にはいきません。6～7 節。このことばからもアキシュがダビデを信頼していることが分かります。そして、善意をもってダビデを理解し、接していることが分かります。異教徒の中にも善意に満ちた良心的な人は多くいます。

アキシュはまず、「主は生きておられる」と言います。このことばはイスラエル人が神、主の前で誓いを立て、何かを語るときの定型句です。本来は、生きておられ、みわざを行っておられる神、主の御前に自分があることの信仰に基づいて語ることばです。アキシュはイスラエルの神、主を信じているわけではありません。そのように言ったのはどうしてでしょうか。

アキシュは、イスラエルの神、主を信じているダビデのことばや態度に接していたことでしょう。そのダビデに対する敬意を持ってこのことばを語ったのでしょうか。神々を信仰する異教徒にとっては、自分が信じる神以外の神々に対しても、その習慣に倣うことは何の問題も感じないでしょう。むしろ、礼儀として相手に合わせるべきであると考えられるでしょう。そういう意味でもアキシュは善意によってダビデに接していました。

しかし、善意がすべて正しいわけではありません。そのような態度は人間中心の考えに基づいています。逆に私たちクリスチャンは、異教の方々に敬意を払うことはあっても、彼らの宗教的習慣に倣うことはしません。それは偶像礼拝につながることであり、主が忌み嫌われることだからです。そのようなクリスチャンの態度は多神教の社会や和をもって尊しとなすという風潮の中では独善的で頑なだと言われるかもしれません。しかし、私たちは唯一のまことの神を恐れるべきです。「主は生きておられる」のですから。

また、アキシュはダビデを「まっすぐな人だ」と評価し、「私と行動をともにしてもらいたかった」、「あなたには何の悪いところも見つげなかったからだ」と言います。ダビデが嘘をついて、隠していることがあるとは微塵も思っていない。このアキシュのことばにダビデは心が痛んだことでしょう。

ダビデはアキシュのために敵対する町々を襲撃し、アキシュにはユダの町やイスラエルに友好的な町を襲ったと嘘をついていたからです。アキシュの信頼を得て、自分と部下たち、それぞれの家族がペリシテ人の地に留まっていられるようにと考え、そうしていました。

それでも、ダビデのすべてが嘘だったわけではありません。アキシュのために誠実に仕えていたのは事実です。そのダビデの人柄の中にある誠実さをアキシュは感じとっていたということでしょう。そのようにダビデのことを評価し、信頼しているアキシュに対して、ダビデは心を痛めたことでしょう。

アキシュは、他の領主たちがダビデの同行を良く思っていないので、「穏やかに帰ってくれ」と言います。それに対してダビデは、アキシュの信頼を裏切らないように、なぜ自分が出陣できないのかと、見せかけの訴えをします。アキシュはダビデをなだめるように言います。9～10節。アキシュはダビデのことを「神の使いのように正しいということをよく知っている」とまで言っています。アキシュにとってダビデは忠実なしもべだと認めていたのです。

ダビデと部下たちはアキシュのことばにしたがって、翌朝早く、自分たちの町ツィクラグに帰って行きました。ほっとしたでしょうし、主が守ってくださったことを感謝したでしょう。

主の守り、主の計らいがありました。サウルやイスラエル軍と戦うわけにはいかない苦しい状況と、アキシュを騙し続ける罪からダビデを救ったのは、神、主を信じていない人々でした。信仰のない者の判断や善意を用いて、主がダビデを守ってくださったのでした。

そのように私たちを守ってくださる主の計らいがあります。主は様々なことを用いて働かれます。信仰のない方たちの言動を用いることもあります。時には、私たち信仰者が罪を犯していることを信仰のない方を用いて主が引き止めてくださることもあるのです。

3. 神の摂理がある (ローマ8:28)

この箇所から神の摂理について教えられます。摂理とは、簡単に言うと、神がこの世界を統治しておられるということです。神は世界を創造された御力をもって、ご自身が造られたこの世界を初めから終わりまで保っておられます。すべてをご自身のみこころにしたがって導かれます。神の御手は隠されているかもしれませんが、神はこの世界を完全に支配しておられます。人々が自由意志によって行動します。自然界に出来事が引き起こされます。サタンが悪のわざを行います。それでも神がすべてを治めて支配しておられます。あるいは、人が神のみこころに反することをしますが、神はそのことも良いことのために用いられます (創世50:20)。

もしダビデがイスラエルと戦ってしまったら、後にイスラエルの王になることはできなかったでしょう。神はご自身が選び、油を注がれたダビデを守られました。神、主を知らないペリシテ人の首長たちを用いて、ダビデが間違いを犯さないように引き止めたのです。

ローマ8章28節。信仰のない人々は起こってくる出来事を見て、運とか偶然、運命とか巡り合わせと言うでしょう。そう言って、幸運と思うかあるいは諦めるしかないと思うでしょう。しかし、聖書が教えているのは、すべてのことの背後に神の御手が働いているということ、永遠につながる救いのために神が導いておられ、「すべてのことがともに働いて益となる」ということです。このことを知り、信じているキリスト者たちは、どのようなことが起こってもその中で、主への信頼と従順、喜びと賛美へと向かわせられるのです。

神のご計画にしたがって召され、信仰を与えられて救われた私たちにも、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。この信仰に立っていきましょう。創造主である神はその御力によって様々なことを用いて私たちの歩みを守ってくださいます。これまでもそれぞれの歩みに主の計らいがあったことでしょう。そして、「主はあなたを…今よりとこしえまでも守られる」のです。主を信頼し、賛美しましょう。